

3章

【問題】（演習）

出典：『建礼門院右京大夫集』／ 亜細亜大学 03年

現代語訳

重衡の三位中将が、（捕虜という）つらい身の上になって、都にしばらくの間（いる）と耳にした頃、「特にとりわけ、昔親しかった人々の中でも、（私は重衡様とは）朝夕なれ親しんで、（この重衡様は）おもしろいことも言い、またちよつとしたことでも、他人に対して、都合のよいように気遣いなどをして、めったにいないような良い方だったのに、どのような（前世の）報いで（こんな身の上になつてしまったのか）」とつらく思われる。（その姿を）見た人が、「お顔は以前のまま変わらず、目も当てられない（さまになつておられた）」などと言うのがつらく、悲しさは言いようがないほどだ。

朝夕に……朝夕慣れ親しんで過ごしていたその昔はこんなことになろうとは思つてもみなかった

返す返すも（重衡の三位中将の）心中が自然と推し量られて、

まだ死なぬ……（死んで来世で身の上を変えるのはやむを得ないが）まだ死んでいないこの世にいるうちに（捕虜というところでもない）身に（姿を）変えて、どんな気持ちで明け暮れ過ごしているのだろうか

また、「維盛の三位中将が、熊野で身投げして（亡くなったそうだ）」と言って、人が口にして気の毒がった。（平家の公達の）どの方も、今の時代（の人々）を見聞きするにつけても、本当に優れていたなどと思ひ出されてくる方々だけれど、（その中でも維盛の中将は）際立ってめつたにないほど優れていた容貌や心遣いが、過去現在を（通じて）見て、ほかに例のなかったことだよ。だから、折々には、褒めない人がいただろうか（いやみんな褒め称えた）。法住寺殿（『後白河法皇の御所』の御祝賀に、「青海波」を舞った時などは、「光源氏（が）すばらしい青海波を舞ったという『源氏物語』の例も自然と思ひ出されることよ」などと、（人々が）言ったものだ。「花のほんのりとした美しい色つやも全く圧倒されてしまいそうだ」などと、聞こえてきたことだよ。その（美しい維盛の中

将の) 面影(を忘れられないの) はもちろんのことで、慣れ親しんできた感慨は、どの人も(同じで忘れたくない)とは言うものの、やはり(すばらしかったこの方については) 特別に感じられる。(維盛の中将は)「(私を資盛と) 同じように思いなさい」と、折々におっしゃったけれども、「そのように(思っております)」と答えたところ、「しかし、(本当に) そうだろうか」とおっしゃったことなど、数々(思い出されて) 悲しいとも言いがたい。

春の花の……春の花の美しさになぞらえていた(維盛の中将の) 面影が、むなしい波の下に朽ち果ててしまったことよ
かなしくも……悲しいことにこんなつらい目を見て熊野灘の波に身を沈めたことだなあ

解答

問 1 4

問 2 (c) 1

(d) 2

(e) 2

問 3 ア 4

イ 1

ウ 2

問 4 5

問 5 ① 9

② 6

③ 3

④ 17

⑤ 18

出典：『建礼門院右京大夫集』／ 東洋大学 98年

現代語訳

翌年の春、(壇ノ浦の合戦で安徳天皇はじめ平家の人々が入水し、自分が思いを寄せていた平資盛さまが) 本当にこの世のほか(の、あの世の人になった)と(聞きたくもなかったことを)とうとう聞いてしまった。その(資盛さまが死んだという悲報の届いた)ころのことは、(それまでのつらさにくらべても)まして、何と言ったらよいだろうか(言葉にはできないほどの悲しみだった)。(このような結果になるということは) みな前々から覚悟していたことではあるが、(現実にはその知らせを聞いてみると) ひたすらつい茫然としてしまうばかりだ。あまり(のこと)にせきとめかねて流す涙も、一方では(側で) 見る人にも(すこしは) 隠さなければならぬような気がするので、どうしたのかと人も思っているのであるが、気分が悪いと(言っ)て、(一日中、衾(＝掛布団として使う着物)を頭から) すっぽりとかぶって寝て暮らしてばかり(いて、(悲しみの) 思いにまかせて泣き過ぐす。どうにかしてその(資盛さまが死んだ) ことを忘れようと思うけれど、(かえって) 生憎にも(資盛さまの在りし日の) 面影は我が身から離れず、(かつて聞いた) 一言一言を(耳に) 聞くような気がして、(我が) 身をさいなむ悲しさは、残りなくすべてを言い表せるすべもない。ただ単に、「(あらかじめ) 定まっている宿命として(自然と寿命が来て) 亡く(なった)」などと聞いた場合でさえ、悲しいことだと(世間では) 言ったり思ったりするけれども、この(ような非業の死の) 場合は何を類例にしたらいいのであろうかと、(他に比べようのないほどの悲しさを) 繰り返し繰り返し思わずにはいられなくて、

なべて世の……一般に世の中の死ということを悲しいと(いうの) は、このような夢(としか思われないつらい目) にあったことのない人が言ったことだろうか

時がたって(ある) 人の所から、「それにしてもこの哀切きまわまることを、どれほど(あなたは悲しんでいらっしやることでしょう) か」と言ってきたので、(まるっきり社交辞令のような) 並ひととおりの挨拶のように感じられて、

かなしとも……言葉にできないほどつらいとも、また胸にこたえらるとも、世間の並(の表現) で言い表すことができるのであればまだよいのですが、(そんな程度の悲しみではあるはずがないことです)

こうして（深い悲しみに、後を追って自分も死にたいと思って）いても、現実には（愛する人を失った後も宿命によって）生き続ける（このつらい）世の通例が（自分もそうかと思うと）情けなく、明けたり暮れたりし（て日を送つ）ているうちに、それでも正気も少し戻ってきて、様々なことをあれこれと思い続けるにつれて、（冷静に自分を見つめる分だけ却って）悲しさもやはりいよいよ強まる気がする。頼りなくしみじみといじらしかった男女の仲の様子も、私一人（だけ）のことではない。同じ（平家の）一族の人々に縁があつ（て契つてはかない目にあつ）た人は、知っている（人）も知らない（人）もやはり大勢にはなるのだが（「大勢いるのだが」、自分のことになると比べるものがないと思われるばかりだ。昔も今も、（老衰などの）普通に穏やかな宿命による（死の）別れはよくあることだけれど、このようにつらいことはいつあつただろうか（これほどに悲しい別れはこれまではなかったことだろう）とばかり思うのもそれはそれとして、ただあれこれと、やはり心になじんでいた（資盛さまの）ことばかりの忘れにくさは、なんとかどうにかしても忘れようと思つてばかりいるのに、（それが）できない（ことが）、悲しくて、

ためしなき……（世間に）他に比べるものもないこのような（悲しい死の）別れをして（おきながら）、それでもやはり（この世に）とどまる（愛しいあの人）の面影が（私の）身に寄り添うばかりで（あの人のことを忘れられないのが）つらく思われる
いかで今は……どうにかして今は（悲しんでも）無駄である（あの人死んだ）ことを悲しまずに、何もかも忘れてしまう気持ちでいたいものなのに

忘れむと……忘れようと思つてもまた（すぐに）思い返して、（悲しみのもととなる、あの人思い出が）跡形もなくなるようなことは（、それもやはり）悲しいことだ（とも思つてしまうのだ）。

解答

問1 ア 8

イ 6

ウ 9

エ 1

問2 3

問3 A 4

E 2

問4 B 4 H 2 I 5 J 5 L 2

問5 (a) 2 (b) 5 (c) 4

問6 10 問7 3 問8 13

問9 4 問10 1・6 問11 6

解説

問1 ア まず、空欄直前「忘れ」が《下二段活用動詞の未然形》または《同・連用形》の形なので、空欄は《未然形接続》か《連用形接続》の語で始まる必要がある。さらに、空欄は下に《引用》の助詞「と」を伴うので文末扱いとなり、空欄を含む節の中の空欄より前に《疑問副詞》「いかで」があるので、空欄は係り結びによって連体形となっているはずである。(係り結びは係助詞だけでなく疑問の連用修飾語によっても起こることに注意。) この条件に合致するのは1「ける」と8「む」である。ここからは文脈把握の問題となるが、このとき注意するのが、「いかで」の用法である。一般に、疑問副詞には《疑問》・《反語》・《詠嘆》の用法があるが、「いかで」および「いかでか」については、上記に加えて《願望》の用法もある。空欄前後では、「ものを忘れ」ることすなわち「なにもかも忘れてしまう」ことを話題にしている。「ける」では「どのようにして私はすべてを忘れてしまったのだろうか」となるが、このあとも作者は苦しみ続けるのだからこれでは意味が通らない。「む」を使って「どうにかして忘れよう」とすべきだ。

イ まず、空欄直前「思」が《ハ行四段活用動詞の語幹》なので、空欄は《ハ行四段活用動詞の活用語尾》からはじまるはずだ。これに合致するのは2「ふ」・3「へり」・6「へ」の三つ。さらに、空欄を含む節の中の空欄より前に係助詞「こそ」があるので、空欄は《已然形活用語尾》であることになって、正解は「へ」。「こそ」已然形で文が終始しない場合は《逆接強調》の用法となるが、この点からも文脈に合致している。なお、空欄の後に読点「、」があるので《終止形》がはいることはないと考えた諸君があるかもしれないが、それはそうとも言えない。本来古文には句読点はなく、出題者などの解釈によって補われた形で出題されて

いる。その際に、終止形の言い切りの形でも、いったん止める形にしておきながら意識の流れはなお続いていくような場合は、句点「。」を打たないことがある。

ウ まず、空欄の直前が《係助詞》なので、空欄は文節の頭となって《自立語》で始まる必要がある。さらに、空欄のあとの読点からそこで意味がいったん切れることがわかるので、係助詞「こそ」との係り結びによって空欄の最後は《已然形》である必要がある。この両方を満たすのは、《ラ行変格活用動詞已然形》の9「あれ」のみ。

エ まず、空欄の直前が《ラ行変格活用動詞の連用形》なので（ラ変動詞終止形には助動詞は接続しない）、空欄は《連用形接続》の語である必要がある。さらに、空欄は下に《引用》の助詞「と」を伴うので文末扱いとなり、空欄を含む節の中の空欄より前に《係助詞》「かは」があるので、空欄は連体形で終わっているはずである。以上を満たすのは1「ける」のみ。

なお、選択肢3「へり」は、《ハ行四段活用動詞の已然形活用語尾》+《存続の助動詞「り」》の形になっている。問題文に「語を選べ」とあるので、これは二語にまたがって不適切だと考えることもできそうだ。しかし、大学入試においては「語」という言葉がつねに「単語」を示すとは限らないので、これもきちんと正解となる可能性を考えておくのは大切なことだ。

問2

設問文に言う「通常の語法としては安定しない」というのは何のことか。一般に、形容詞の《本活用連用形》のあとに《係助詞》がくると、そのあとには《あり》系の補助動詞（《あり》・《はべり》・《さぶらふ》・《おはす》・《おはします》など）がくることが多い。たとえば、「うつくし」を係り結びで強調するときに「うつくしくぞある」・「うつくしくなむはべる」といった具合である。

またこれとは別に、形容詞「多し」については、活用に特色があることに注意しておこう。一般に、形容詞の活用は「○・く・し・き・けれ・○」の《本活用》と「から・かり・○・かる・○・かれ」の《補助活用》とで構成され、《補助活用》列は主として助動詞を接続するために用いる。しかし「多し」に関しては《補助活用》列が《本活用》的に用いられることが普通で、そのため終止形「多かり」や已然形「多かれ」が存在してこちらの方がよく用いられるという特色がある。そしてこの「多かり」は、「多くあり」の熟合したものと考えられるものである。

なお、活用の仕方が通常とは異なる形容詞としては、もうひとつ「同じ」がある。これは、《本活用》列の《終止形》と《連体形》が同形となる点が他の形容詞とは異なっている。設問で「活用の仕方が普通でない形容詞を問題文中から抜き出せ」などとあ

れば「『多かり』か『同じ』を探せ」と言っているようなものだ。二語とも古語辞典を引いて確認しておくとうい。

問3 A 「またの」は通常「他の・別の」の意味だが、時間単位に関係する名詞（年・月・日など）と連語になると「次の・翌・明くる」といった意味になる。

E 形容動詞「あやにくなり」は漢字では「生憎なり」と表記され、これでわかるように現代語の「あいにくだ」の直接の祖先である。「自分の期待とはうらはらに悪い結果がもたらされたときの落胆・困惑の心情」のように理解しておくとうい。

問4 B 《係助詞》「や・か」はどちらも《疑問》・《反語》の両方を表しうるが、これが「やは・かは」となると普通は《反語》の用法となる。「なにとかはいはむ」は「なにとはいはむ」の反語だから、「言ふ」の否定文となるはずだ。選択肢1・2は肯定文的願望表現となつて不適。3は疑問文型中に準体助詞「の」がはいるとふつうは《疑問》の意に固定される（Ⅱ《反語》文には聞こえにくい）ので不適。5は疑問語の訳に相当する部分が「どうしたら」となっており、これは「いかに」などの語で示されるべきことだから不適。

H 《助動詞》「つ・ぬ」が類義・対義語に続けて重ねて用いられている場合、これは《完了》や《確述》でなく《並列》の用法となる。現代語の「たり」（たとえば類義「踏んだり蹴ったり」・対義「行ったり来たり」など）に相当する。

I 原文の「契り」の訳語に相当する選択肢末尾だけで、1・3の「年月」は排除できる。また「あはれなり」は「しみじみと胸を打つような心情一般」を言うのだから、4の「つまらなかつた」も遠い。残る2・5については、続く傍線部J「おなじゆかりの夢見る人」以下と連動させて考える。あとで見るようにこれは「平家の君達と恋仲だった女性たち」のことを言うので、5が正解となる。

J 「ゆかり」は「血縁・姻戚関係によるつながり（のある人）」の意味だから、これで1を排除する。また、続く「さしあたり」が古文では「自分のこととして現実化すると」の意味で用いられることに鑑みれば、傍線部の「同じ」は「自分と同じように」の意味を持つことになる。作者は平資盛と恋仲にあったが、平家一門の滅亡のために恋人を失った身の上である。これで3・4のような肯定的な内容の選択肢を捨てる。また2では被修飾語が「あの人」となっており、特定の人物を問題にしていることになるが、それでは傍線部K「多くこそなれど」に結びつかない。よって正解は5。

㊦ 《疑問副詞》「いかで」の用法上の注意点は、問1アで見たとおり。この語はもともと「いかにて」の熟合したものであるから、「如何^{いか}」の意味合いから考えると（《原因・理由》に対する疑問ではなく）《方法・手段・様態》に対する疑問が根柢にある。したがって「なぜ」としている選択肢1・3が消える。残る選択肢の違いは2《願望》・4《反語》・5《疑問》という意識の違いとなる。これは文脈で確認するしかない。これについては、傍線部に続いて「〜とのみ思へど、かなはぬ（コトガ）、悲しくて」とあるので、傍線部は「期待」を込めた表現だと考えて、2《願望》を採る。

問5 和歌の解釈においては、次の三点を大切にするとよい。すなわち、

- 1 まず《詞書》（＝和歌に至る地の文）の内容から、和歌に込められた感情を推定する。
- 2 次に《句切れ》（＝文法的には述語にあたる）の部分で和歌の中心と見て、構文にしたがって解釈する。
- 3 その際に、《修辭》（とくに《掛詞》に注意）が使われていないか確認する。

右の1について先に見ておこう。(1)の歌では、直前に「これは、なにをかためしにせむと、かへすがへすおぼえて」とあり、指示語「これ」の指示対象を考えると、「恋人を戦で失った、他に比べようもない悲しみ」程度となる。(2)では、直前に「人のもとより、さてもこのあはれ、いかばかりかといひたれば、なべてのことのやうにおぼえて」とあるので、「他者の慰めが等閑なものに感じられる心境」程度。(3)から(5)までは共通で、直前に「いかでいかで今は忘れむとのみ思へど、かなはぬ、かなしくて」とあるので、「恋人を失った悲しみを忘れてしまいたい忘れられようもない辛さ」程度となろう。

また右の2については、それぞれの歌の《句切れ》＝《述語》を中心に抜き出すと、

- (1) かかる夢みぬ人やいひけむ……こんな目にあわない人が言つたのだろうか
 - (2) 世のつねにいふべきことにあらばこそあらめ……並一通りに言えることならよいのだが
 - (3) 身にそふぞ憂き……我が身から離れないのが辛い
 - (4) 物忘れする心にもがな……何もかも忘れてしまえるといいのに
 - (5) 名残りなからむことぞかなしき……跡形もなく消えるのは悲しい
- などとなる。これらを念頭に置いて考えよう。

- (a) 設問に「怒りにも似た感情」とあるが、右に見たように、「悲しみ・辛さ」が直接の表現内容となっていないのは(2)だけで

ある。《述語》にふくまれる「あらばこそあらめ」の係り結びは《逆接》のニュアンスを含んだ《適當》「～すればよいが・～ならばよいが」の表現で、《詞書き》と《述語》をあわせて考えると、実^{じつ}のない慰めにやり場のないつらさを八つ当たりして皮肉を言っているような調子である。

(b) 設問の「矛盾を含んだ複雑な心情」に鑑みて、和歌の《述語》部分に表された感情と相反する内容を含む歌を探せばよい。
(5)の歌の「忘れむと思ひても」がそれにあたり、《述語》部分との橋渡しの「またたちかへり」が「反対に」のニュアンスを担っている。

(c) (1) Ⅱ「や……けむ」、(2) Ⅱ「こそ……め」、(3) Ⅱ「ぞ・憂き」、(5) Ⅱ「ぞ・かなしき」がそれぞれ《係り結び》になっている。よって(4)を採る。

問6 問題となった「ほれほれと」は、漢字では「惚れ惚れと」と表記され、「恍惚」状態をいう。現代語では「讚嘆」のような肯定的なニュアンスを含んでうっとりしている様子を言うが、もともとは「放心」などのほんやりした状態を言った。現代語にも「老いぼれ」の「ほれ」に残っている。これと「対照的な意味で用いられている」というのだから、「意識がはつきりしている状態」を示す語を探すことになり、またとくに設問文で「名詞」と指定されているのも大きなヒントになる。ここでは10行目の「うつし心」がそれで、漢字では「現し心」と書き、「現実的で冷静な意識」を意味する。「夢」の対義語の「現^{うつし}」を知っていれば容易に正解にたどりつけただろう。

問7 傍線部が《已然形＋「ば」》で《順接確定条件》の形になっており、《原因理由》を示していると考えられるので、その結果としても適切なものを選ぶことになる。

ここで注意すべきことが一つある。形容詞「つつまし」は動詞「つつむ」と派生関係にある語で、「なにかを包み隠したいような気持ち」を言い、現代語の「慎ましい」とは微妙にニュアンスを異にするということだ。(右の意味が「気が引けて遠慮がちに感じる気持ち」を経て現代語の「遠慮深い様子」に移ったと考えるとわかりやすいだろう。)

さて、傍線部自体の意味は、逐語訳的には「(私の様子を) 見る人も遠慮がちなので」などとしてしまいがちだが、実はそうではない。傍線部の直後に「なにか人も思ふらめど」とあり、他者を主語とした表現はこの部分であって、「他者から自分への詮

索の視線」が表現されている。これは傍線部の「包み隠したい気持ち」とは反対の心理状態の現れだから、前の段落で確認したものと合わせると、傍線部は「私を見る人の目も気になったから」といった意味で自分自身の心情を表現した言葉だということになる。「あまりの悲嘆を他人に見せたくない」といった心情が《原因理由》なのだから、その《帰結》となる行為としては、3「寝具を」引きかぶって（一日中）寝て暮らす」を選ぶのが妥当である。

問8 設問に「ほぼ同じ意味」とあるので、まずは傍線部に含まれる語と同じ語として「限り」・「命」・「はかなく」などを含む表現を

拾ってゆくという手が考えられるが、これだけではやはり漠然としすぎている。なんらかのもう少し明確な目当てを得られないだろうか。

「かぎりある命」とは「限界のある寿命」の意味だが、古人が寿命・生命を話題にするときは、その発想の根本に「仏道」があることを忘れてはならない。仏道の教えに依れば、「寿命には限界がある」というのは、「人の一生はもともと定まっている」といった意味合いを含むことになり、したがって「かぎりある命にてはかなく（なる）」というのは、「生まれる前から定まっていた宿命によって死を迎える」という意味になる。ここで、この文中で作者の意識の対象の中心にあるのは「恋人・平資盛の、平家一門の滅亡に殉じた死」である。これも宿命といえそうなのだろうが、平家の嫡流として栄華を極めていた恋人が合戦によって命を落としたと聞いたときの作者には、これを宿命と割り切って受け入れることはできなかった。つまり、資盛の死は作者にとってはまさに「非業の死」と感ぜられたわけだ。したがって、「生まれる前から定まっていた宿命によって死を迎える」というのは、「非業の死」とは対照的な「宿命からすれば順当な死」だということになる。このことも考えに入れながらその同義表現を探すことが、目当てとなるだろう。すると、これに相当するのが13行目の「のどかなる限りある別れ」である。「限り」の語も傍線部と共通することを、確認材料とすることができる。

問9 問1イで見たとおり、傍線部の前は逆接表現となっているので、傍線部の指示語は直前ではなく、そのもうひとつ前に述べられた

ことを指すと考えるべきだ。すなわち、傍線部の前の逆接される部分は「ただかぎりある命にていひ思へ」でひとまとまりになっているので、その前の「あやにくに面影は身にそひ、言の葉ごとに聞く心ちして、身をせめてかなしきこと、いひ尽すべきかなし」を指すものと考ええる。これは、端的に言えば「恋人・平資盛の死」を意味する。

1 「聞きしこと」(5行目)は、傍線部直前の逆接部に含まれるので、指示対象ではない。2 「なべてのこと」(8行目)は、「世間一般にありがちなこと」だから不適。3 「いふべきこと」(9行目)も、直前に「世のつねに」とあって2と同様に不適。4 「かく憂きこと」(13行目)は、「世間一般の死ならまだしも、こんなに辛いことはない」という表現の展開のボタンが傍線部の前後と共通する。5 「思ひなれにしこと」(14行目)は「資盛との思い出」の意味で紛らわしいが、これは資盛の生前のことだから、悲報に接した悲しみとは別物である。

問10

1 文章全体が「悲嘆」に満ちており、これまでも見てきたように、文章中に何カ所もだれかの死の報せに接したための悲嘆であることが述べられている。ただし、これは「恋人」に限ったことではなく、「大切な人」ならだれでもよさそうでもある。これが「恋人を失ってしまった」ことに由来するものであると積極的に判断する材料は、実は文学史の知識による。大学入試においては、『建礼門院右京大夫集』がそうした作品であることは古典文学史上の常識である。

2 「親」が不適。右に述べたように、問題文中には「親」と「恋人」のどちらなのかが判断できる部分はない。文学史の知識による判断が要求されている。

3 「やりとり」が不適。問題文中には贈答歌は見られない。

4 「深さ」が不適。むしろ、世間の人からの同情心については8行目に「なべてのことのやうにおぼえて」とある。

5 「物語」が不適。題名からもわかるように、この作品は「私家集」なのだが、その《詞書き》が大変に詳しいので、実質的には「日記」として読まれている。

6 右に見たとおりで、この選択肢が5と対比すべき内容になり、妥当である。

問11

『建礼門院右京大夫集』の作者は、「建礼門院」平徳子(清盛の娘・高倉天皇中宮・安徳天皇の生母)に仕えて「右京大夫」と呼ばれた女房で、歌人としての才能を高く評価されていた。作者自身は藤原氏だが、当時全盛を誇った平家の出身である中宮に女房として仕えたために、平家の公達と交際するうちに、清盛の孫・資盛と恋に落ち、資盛の死によって悲しみを極めた後、出家を考えたが状況が許さず、後鳥羽上皇の時代まで宮廷に仕えた。……といったことがわかるのも、この作品が私家集でありながら事実上の日記文学だからである。問10の選択肢1・5の解説も参照のこと。

右のことから、選択肢としては6「平家物語」と7「新古今和歌集」との妥当性を比較することになる。6は平家一門の栄華と滅亡に焦点をあてた作品で、まさに作者の人生と重なる。7にも作者の歌は採られているが、それはあくまでも当時を代表する歌人たちのひとりとしてのことである。「『建礼門院右京大夫集』の内容ともっとも関係の深いもの」と言われれば、『平家物語』を採らざるをえない。